

第1部

事業編

---

# 1. 2011年度の事業報告

## 活動の概要

### ○2011年度業務計画書

国際常民文化研究機構の活動は、業務計画書に則って遂行される。本年度の業務計画書は、資料編に掲載されており、それを参照のこと。

### ○2011年度の活動概要

具体的な活動概要については、後述の第1業務、第2業務、第3業務の活動概要報告に譲るが、全体的な視点から本機構の活動について総括する。

第1業務は、日本常民文化研究所所蔵資料である漁業制度資料とアチックミュージアム写真資料のデジタル化を目的としている。3年度目にあたる2011年度も引き続きその作業を継続した。「漁業制度資料」については、計画通りに大阪、兵庫、香川の筆写稿本の詳細目録を作成し、大型絵図についても1810点のデジタル化が完成している。計画としては、瀬戸内海周辺の県はほとんど終了し、今後日本海から北上して太平洋岸を下ってくる予定である。2011年度までで47県中21県分のデジタル化が終了している。分量としては、全体の約2分の1が終了したことになる。残りの2年度で、デジタル化作業をすべて完成させる予定である。

「アチックミュージアム写真資料」は、計画よりは2地域ほど少なく、伊豆諸島と隠岐について終了した。本写真資料は、公開可能なものが4000枚ほどあり、これまでにその約半数がデジタル化された。残る2年度ですべてをデジタル化する予定である。また、『アチック写真』6号として、隠岐の写真資料集を発行した。この写真資料集は、アチック写真の現地調査に持参して地元の方々に配布しており、第2業務の高城玲代表の「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」班は、台湾屏東県のパイワン族の村、そしてトカラ列島口之島と仲之島に行つてアチック写真の現地調査を行なっている。また、澁澤財団の予算で韓国多島海にも出張し、アチック写真の現地調査を行ない、そこに写っていた当時1歳の男児ご本人と出会った。ご本人は、もう80歳近い年齢になり、母親に抱かれた自分の写真に遭遇して感無量の様子であった。アチック写真のデジタル化を進める一方で、このような調査を今後も進めていく。

また、これらの資料がデジタル化された後の、公開方法について検討を行ない、公開準備を進める必要がある。

第2業務では、3年間の調査研究期間の最終年度として、8プロジェクト全体で80回の調査研究が行われ、うち海外調査は23回であった。その参加者はのべ100名をゆうに超し、共同研究者と研究協力者合計86名が、1回以上調査研究に参加したことになる。

第2業務の課題は、2012・2013年度における研究成果のまとめであり、これは本機構の研究成果の公開事業として重要なウエイトを占める事業活動である。これについて2011年

12月17日と22日に共同研究代表者会議を開催して最終的に検討し、「共同研究事業計画(2012・2013年度)について」を策定した。その内容は、(1)成果報告の方法として、①研究成果報告書の刊行、②研究成果発表会の開催、③データベースの公開の3種類を基本とする。①と②はすべてのプロジェクトにお願いし、③については、該当するプロジェクトが行うこととする。(2)上記①と②の年度の振り分けについては、8プロジェクトを二つのグループに分け、2012年度は4つのプロジェクトが成果報告書を作成し、残りの4プロジェクトが公開成果報告会を開催することとなった。2013年度は、その逆の成果報告活動を行なう。(3)②の研究成果報告会は、一般を対象としたシンポジウム形式ではなく、機構の共同研究員を中心とした公開討論形式とし、研究者ネットワークの形成に主眼を置くこととする。そのために、なるべくいくつかのプロジェクトと合同して行なうような企画を立てるものとする。この3項目を基本として、2012・2013年度に成果報告が行なわれることになる。

第3業務は、第3回国際常民シンポジウムを行った。公開研究会も第5回、第6回、第7回と3回開催され、一般参加も多く、第6回では参加者40名のうち半数が一般参加者であった。海外研究機関とのネットワーク形成については、軌道に乗ってきたと考えられる。12月には、サンパウロ大学日本文化研究所との協定締結を決定し、手続きが始まっている。それに先駆けて、9月に本機構研究員3名がサンパウロを訪問して交流を行ない、それを受けて2月にサンパウロ大学の森幸一教授を招聘して、研究会を開催したとともに、神奈川県沖縄県人会調査を共同で行った。

また、韓国木浦大学校島嶼文化研究院と協定を締結し、早速2月に木浦大学を訪問すると同時に、本機構と島嶼文化研究院の共同調査として前述したアチック写真の現地調査として多島海を訪問した。さらに、協定機関との共同調査を推進するために、愛媛県二神島において本機構と木浦大学校島嶼文化研究院、上海海洋大学の合同で民俗調査を行なった。このような協定機関との合同調査を継続していく計画である。

2011年度の大きな活動としては、文部科学省研究振興局学術機関課による「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」中間評価が10月19日に実施された。池上和夫学術担当副学長、佐野賢治機構運営委員長、小熊誠副委員長、越智信也事務担当が出席し、中間評価に臨んだ。そこでは、専門委員から「共同研究拠点の趣旨から見て研究の広がりという観点から役割を果たしているとはいえないため、新規課題の公募・実施に取り組むことが不可欠である」と研究ネットワークの拡大についての意見が付された。それを受けて、新規に研究プロジェクトを公募することは不可能であるため、既存のプロジェクトに新規の共同研究員を公募するという方法を採用ことにした。

以上、2011年度はほぼ計画に則した活動を展開できたと評価できよう。それに加えて、文部科学省の中間評価の対応や協定機関との交流については、大きな進展を見ることができた。2012年度以降は、これまでの活動のまとめの時期に入り、とくに第2業務の研究成果報告活動に多くの人的および予算的焦点が移ることになる。さらに、2013年度の推進事業終了後における本機構の組織的位置づけと活動内容についての検討を本格化させる必要がある。

(小熊 誠)

## 1) 所蔵資料の情報共有化 業務報告

「国際常民文化研究機構」の事業内容のうち、第1業務「所蔵資料の情報の共有化」では、日本常民文化研究所とCOEプログラムの後継組織である非文字資料研究センター（日本常民文化研究所付置）が所蔵する諸資料を広く社会に公開、提供するため、その情報の共有化と発信を促進することを目的としている。中核となる常民研は、長年の研究活動により日本の歴史・民俗に係わる生活資料を多方面から発掘し、とくに、漁業制度資料調査による筆写稿本の原稿約30万枚をはじめ、常民生活絵引原画、アチック写真、民具の全国調査データベース、民族学振興会関係資料など、世界的にも価値の高い諸資料を収集、所蔵している。

第1業務では、こうした諸資料をデータベース化し、国内外の研究コミュニティに公開、共有化することによって、新たな研究分野の開拓とさらなる研究の進展、深化を図ることになる。本機構の業務開始以後、第1業務は歴史関係資料と民俗関係資料の二つの部門に分かれ、それぞれの担当者が専門性を活かしながら事業を推進してきた。以下、2011年度の業務について、「漁業制度資料」「アチック写真」に分けて報告する。

（田上 繁）

### 1. 漁業制度資料

#### (1) 2011年度の作業概要

「神奈川大学国際常民文化研究機構 年報2」（平成23年8月刊行）において漁業制度資料の保存と整理および筆写稿本の概要について説明した。ここでは、2011年度の作業および共同研究グループとの連携の状況について説明する。

「漁業制度資料」の文化資源化を目指す過程は、次の4段階であることは上記「年報2」に詳しく記した。項目名のみ再掲する。

- ① 写真撮影・デジタル化
- ② 概要目録作成
- ③ 詳細目録
- ④ 図像資料の写真撮影とデジタル化・目録化

①については、写真撮影は既に終了しているが、デジタル化については、順次作業を継続している。

②については、平成23年11月に、独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所（以下中央水研）が神奈川大学日本常民文化研究所（以下、常民研）との連携のもと、『中央水産研究所所蔵筆写稿本（漁業制度資料）の概要』を刊行した。これは、筆写稿本の資料群ごとに、採訪地・採訪時期・原稿枚数・絵図等の添付資料の有無・旧村旧領名等についてまとめ、北から順に都道府県別に配列したものである。筆写稿本は中央水研と常民研に同一のものが一部ずつ保管されているが、過去の両者への分割が必ずしも正確に行なわれ

なかったこともあって、現状としては両者の間に異同がある。また、製本の方法も異なっており、上記の概要目録はあくまでも中央水研が保管する筆写稿本をもとに作成したものである。今後、順次常民研に保管されている筆写稿本との対照作業を進めていき、全容が分かるものを作成していきたい。③④については、それぞれ節をあらためて記す。

## (2) 2011年度の作業状況

### ① 詳細目録の作成

今年度は、大阪府・兵庫県・香川県について詳細目録を取る作業を進めた。以下に、県別の資料群ごとの一覧表とその概要を掲げる。

大阪府の資料群一覧

No.	資料群名	探訪時住所	文書 点数	絵図 有無	稿本番号*	概要*
1	外山檜千代家文書	大阪府堺市深井町	1		1044	〈1〉
2	岸和田高校文書	大阪府岸和田市	32		1045	〈2〉
3	貝塚漁業協同組合文書	大阪府貝塚市北町	1		1046	〈3〉
4	田尻漁業協同組合絵図	大阪府泉南郡田尻村	6	○	1048	〈4〉
5	田尻村役場文書	大阪府泉南郡田尻村	1		1049	〈5〉
6	谷口穎璋家文書	大阪府泉南郡田尻村	1		1040	〈6〉
7	西鳥取漁業協同組合文書	大阪府泉南郡西鳥取村	5		1051～1058	〈7〉
8	木村九壽雄家文書	大阪府泉南郡西鳥取村	14		1059	〈8〉
9	深日漁業組合文書	大阪府泉南郡深日町	1		1060	〈9〉
10	大阪府泉南郡深日漁業調査	大阪府泉南郡深日町	1		1061	〈10〉
11	津田秀夫 泉州水産史料（藤田健三家文書）	大阪府泉佐野市	27		1063	〈11〉

\* 点数にカッコがあるものは未確定

\* 稿本番号は神奈川大学日本常民文化研究所に収蔵されている筆写稿本の通番号

\* 概要欄の〈1〉～は、下記に資料群概要の記述のあるもの

(以下同様)

### 【大阪府の資料の概要】

- 〈1〉天保5年(1834)11月「応対地加入銀請取事」。
- 〈2〉岸和田の春木村にかかわる古文書群。文禄3年(1594)「和泉国南郡嘉守郷春木村御檢地帳」2冊が最も古い。近世の久米田池をめぐる訴訟関係文書や大工職にかかわる争論文書などが目を引く。
- 〈3〉明治35年(1902)以降の貝塚漁業組合「総会決議録 予算決算書類・組合経費分賦収入方法・剰余金処分書」(ただし筆稿は抄録)。
- 〈4〉「町村浦特占漁場区域点要記」「地先水面専用漁業図」「徳島県 漁場図 田尻村嘉祥之分」が各2葉あり。
- 〈5〉嘉祥寺村の明治10年(1877)「分配金割渡簿」。
- 〈6〉上野山嘉吉が谷口市藏に宛てた明治17年(1884)「朋友結の文書之事」。
- 〈7〉明治35年(1902)～昭和17年(1942)頃の西鳥取漁業組合の規約・役員認可関係の簿冊、経費予算・賦課徴収方法に関する諸書類を綴った簿冊4冊(内3冊には絵図あり)のほか、大正10年(1921)「下荘村・淡輪村 地先蛸釣入漁期間契約書」がある。

- 〈8〉波有手村にかかわる、万治2年（1659）から明和3年（1766）にかけての一紙文書。  
万治～寛文年間の文書は新村や貝掛村など近隣村落との村境論・浜論関係史料、元禄年間の文書は谷川入江の船入り修繕関係史料が主なもの。
- 〈9〉明治33年（1900）～大正10年（1921）の「古文書及諸契約書綴（深日村漁船持主規約・加太領海面漁場入漁規約等写し綴）」。
- 〈10〉昭和24年（1949）に宮本常一が作成した「大阪府泉南深日町漁業調査」。
- 〈11〉永享3年（1431）「定置十二谷下池之契約状事」をはじめ、近世初期・前期には佐野の十二谷下池関係の由緒などを語る史料が多い。近世中期には佐野村検地や年貢・諸役についての文書が残る。

兵庫県資料群一覧

No.	資料群名	探訪時住所	文書 点数	絵図 有無	稿本番号*	概要*
1	駒ヶ林漁業協同組合文書	兵庫県神戸市駒ヶ林	1	○	1064	〈12〉
2	大西秀市家文書（全）漁場・漁業経営雇用関係	兵庫県明石市東二見町	40		1065	〈13〉
3	東二見漁業協同組合文書	兵庫県明石市東二見町	24	○	1066	〈14〉
4	室津浦漁業協同組合文書	兵庫県揖保郡室津村	4	○	1067～1070	〈15〉
5	岩屋漁業協同組合文書	兵庫県津名郡岩屋町	4	○	1072	〈16〉
6	中谷芳太郎家文書	兵庫県津名郡岩屋町	3		1073	〈17〉
7	富島町漁業協同組合文書	兵庫県津名郡富島町	21	○	1075	〈18〉
8	仮屋漁業協同組合文書	兵庫県津名郡仮屋町	1	○	1076～1077	〈19〉
9	郡家浦漁業協同組合文書	兵庫県津名郡郡家町	51	○		〈20〉
10	郡家町役場文書	兵庫県津名郡郡家町	13	○	1063	〈21〉
11	志智嘉九郎家文書	兵庫県津名郡郡家町	11		1085	〈22〉
12	春海浩家文書	兵庫県津名郡郡家町	45		1086	〈23〉
13	鳥飼浦漁業協同組合文書	兵庫県津名郡鳥飼村	40	○	1087～1090	〈24〉
14	由良町漁業会文書	兵庫県由良町	1	○	1091	〈25〉
15	仲野九郎家文書	兵庫県三原郡阿那賀村	84	○	1093～1099	〈26〉
16	福良漁業協同組合文書	兵庫県三原郡福良町	6		1100	〈27〉
17	沼島漁業協同組合文書	兵庫県三原郡沼島村	6		1101	〈28〉
18	阿万町漁業協同組合文書	兵庫県三原郡阿万町	6	○	1102	〈29〉

## 【兵庫県の資料の概要】

- 〈12〉緊要事跡留。
- 〈13〉安永年間の運上に関する文書、嘉永年間の鯛網算用帳や江戸から明治期の「鯛網番割之事」のほか、明治期の漁船譲渡や、明治7年の無鑑札地引網に関する争論を伝える文書など多岐にわたる文書が収められている。中でも、幕末の京都焼失後の京都の状況を伝える書状などは注目される。
- 〈14〉元禄3年（1690）「東二見村、西二見村、西浦肴運上の儀につき願書」を最古とし、大正2年「手続書」までの長期にわたる史料を収める。大半が明治以降の水産や漁業組合に関するものであるが、安永年間の「永代帳」のようなものも含まれている。
- 〈15〉明治から大正期の漁業組合関係の報告書等の綴。
- 〈16〉明治期の漁業組合同規約や昭和2年の臨時総会決議案を収める。
- 〈17〉明治23年（1890）の八手網裁判に関する一連の書類を収める。

- 〈18〉すべて明治・大正期の史料。漁業権に関する諸記録や二艘ゴチ網使用停止に関する文書のほか、おこば掛漁業に関する陳情書、鯨網入札の議事録などを収める。
- 〈19〉明治28年（1895）および明治35年（1902）作成の契約書の綴。
- 〈20〉近世から大正期の文書を収める。近世史料は「申上候覚（尾崎村地曳鯛漁につき）」や庄屋役儀に関する文書など僅かで、その大半は明治期以降の規約書、規則書、申請許可書、調書の類である。
- 〈21〉明治期の史料が大多数を占める。旧魚税地網代里程調書や沿海取調などの調書のほか、採魚採藻、網代場、村境など多岐にわたる嘆願書が多いのが特徴である。
- 〈22〉明治33年（1900）の組合決議録其他要件日誌などが含まれるものの、多くは献立に関するものである。
- 〈23〉幕末から明治期の史料。廻船の売買や金銭貸借に関する文書のほか、地所小作證、受領証類などが収められている。全体的に売買や貸借に関する証文が多い。
- 〈24〉近世文書としては、御用金や諸役に関する願書・通達類のほか、明治39年の鳥飼下村漁民の漁業権侵害に関する訴訟一件書類が多数を占める。
- 〈25〉大正2年（1913）作成の諸契約書の綴。
- 〈26〉寛永21年（1644）の「西之神代十一ヶ村五月三時什物之事」を最古とし、最新は昭和16年（1941）の齋津漁業組合延縄被害事件に関する一連の書状に至る長期に及ぶ史料を収めている。大正期の鳴門海峡帰属問題に関わる史料や漁業関係のみならず、神仏事祭礼など信仰に関わる史料が多いのも特徴である。
- 〈27〉大正6年（1917）「福良鱈網組 吹上組手傳 覚書」のほか、明治から大正期の諸契約書を収める。
- 〈28〉近世と明治の史料が同数収められている。年号が分かる寛政4年（1792）「乍恐奉願口上書覚（鯖魚夜焼釣船の運上につき）」明治42年（1909）「灘村中着網使用ニ付覚書」まで、ほとんどが漁業に関連する史料である。
- 〈29〉明治期の漁業免許願書、入漁契約書などが収められる。

香川県の資料群一覧

No.	資料群名	採訪時住所	文書点数	絵図有無	稿本番号*	概要*
1	塩飽島中共有文書	香川県仲多度郡本島村	作成中	○	1573～1609	〈30〉
2	泊浦部落共有文書	香川県仲多度郡本島村	11		1610	〈31〉
3	桐山鍋市家文書	香川県仲多度郡本島村	1		1611	〈32〉
4	藤井致一家文書	香川県仲多度郡本島村	作成中		1612～1617	〈33〉
5	宮本秀太郎家文書	香川県仲多度郡本島村	13		1619	〈34〉
6	吉田薫家文書	香川県仲多度郡本島村	43		1621	〈35〉
7	宮本傳吉郎家文書	香川県仲多度郡本島村	1		1622	〈36〉
8	石川家文書	香川県仲多度郡本島村	1		1624	〈37〉
9	大前源吉家文書	香川県仲多度郡與島村				

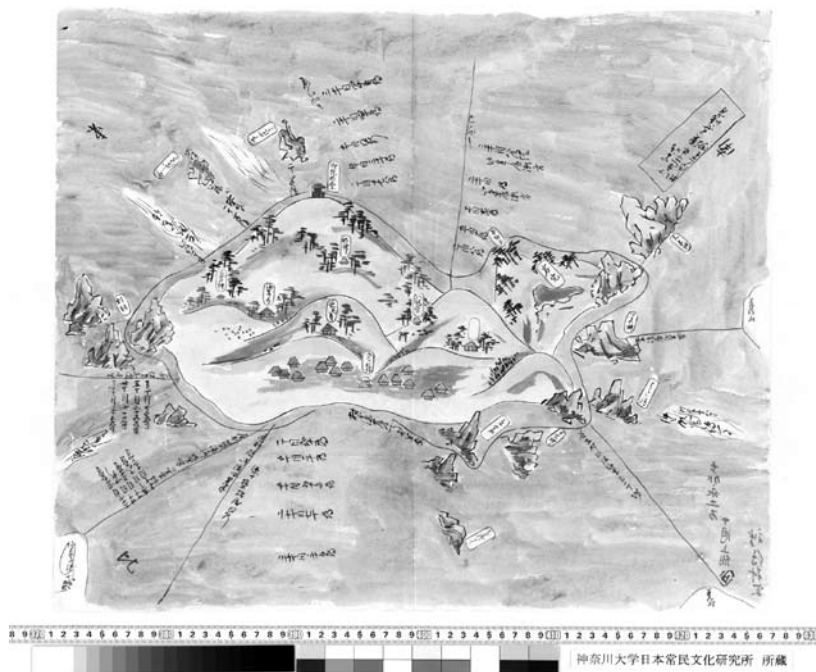
### 【香川県の資料の概要】

- 〈30〉「塩飽島中」の共有文書。宝永元年（1704）「塩飽島納方配合帳」や同3年「御用水主銀納之訳」のほか、幕末維新期の「仮日記」はまとまった史料群として注目される。

- 〈31〉明治27年（1894）「為取換定約証（塩田問屋に関する定約証拠）」をはじめ、明治期の「協定書 但シ塩田ニ関スル由来」「（塩田物議に関する裁判調書）」、そして昭和4年（1929）「陳情書（琴浦町鎌田弥太郎塩田築造の件につき陳情書、控え）」など、本島の塩田関係を中心とする史料群。
- 〈32〉本島村漁業組合宛の大正7年（1918）「寄魚専用漁業免許状」（簿冊）。
- 〈33〉安政6年（1859）「借用申証文之事（流瀬網式帖仕込金7両借用）」、慶応2年（1866）「借用申証文之事（所持船乗出書入れ金3両借用）」をはじめ、一紙文書を中心とするまとまった史料群。
- 〈34〉塩飽年寄の宮本助之丞家に伝来した史料群。寛永7年（1630）「（朱印状訴訟一件につき書状）」のほか塩飽宛朱印状管理に関する書状・覚書類、六口島など三島の帰属をめぐる絵図作成についての書状類。
- 〈35〉塩飽年寄の吉田彦右衛門家に伝来した史料群。ほとんどが一紙文書。寛永7年（1630）「（朱印状訴訟一件につき書状、写し）」のほか塩飽宛朱印状管理に関する書状・覚書類、万治2年（1659）「下津井四ヶ浦より指上ヶ申浦肴之覚」、寛保3年（1743）「島中御仕置書并獵場御裁許書覚」など浦方支配をめぐる史料のほか、年未詳ながら大工仲間にかかわる史料など。
- 〈36〉近世の御城米船難船についての役用日記。
- 〈37〉安政7年（万延元、1860）に咸臨丸で渡米した際の「日記」である。

## ② 別添大型模写絵図の資料化

「漁業制度資料調査保存事業」（1949～1955年）で全国の漁業・漁村関係資料を収集して筆写した際、資料に附属する漁場図などの絵図類については、別に専門の



近世期に描かれた答志島（愛知県）周辺の漁場図の模写



画家に模写を依頼した。それらの絵図類は概ね筆写稿本に綴じられているが、サイズが大型のものは、筆写資料とは別に保存され、現在常民研に保管されている。これらの絵図は4畳半ほどの大きさのものもあり、閲覧に不便なため、大型スキャナーによるデジタル化を進め、簡易目録とともにウェブサイト上での公開を準備している。

「漁業制度資料」に含まれる漁場図などは、近世期に村落間で漁場争論などが持ち上がった際、あるいは近代以降の漁業協同組合などが漁業権の申請を行なう際に作成されたものが大半を占めており、他の書類と一括して保管されていたものと考えられる。大型模写絵図は筆写稿本の書類と別に伝来したために、必ずしも元の資料群が特定できないものもある。本機構の共同研究「漁場利用の比較研究」グループとの関連も想定される。

### (3) 共同研究班への資料提供

「プロジェクト型共同研究の推進」業務のうち、共同研究「日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究」と連携して、漁業制度資料の活用を図っている。今年度については、共同研究者が旧所蔵者あるいは機関を特定して追跡調査を行い、その一部については現在も原資料が保存されていることが確認されたが、失われてしまったと認められるものもあった。これらの確認作業を継続することによって、今後、筆写稿本を研究資料として活用する上での基本情報の蓄積を図りたい。

## 2. アチック写真

神奈川大学国際常民文化研究機構では、神奈川大学日本常民文化研究所の所蔵する資料を研究者に公開・共有化し、研究分野を拡大・深化させる目的を目標としている。本稿は、「所蔵資料の情報共有化」における2011年度の「アチック写真」の資料整理状況・公開、各共同研究班におけるその活用状況の報告である。

### (1) アチック写真の整理について

#### 整理前の状況

神奈川大学日本常民文化研究所（以下、常民研）には昭和初期から撮影された日本・朝鮮・台湾などの9000枚におよぶ写真や、30本を超える16mmフィルムが所蔵されている。常民研の前身であるアチック・ミュージアムは、澁澤敬三（以下、敬三）が、物置小屋の屋根裏に植物の押し葉や貝の化石などを集めた彼の高校時代からはじま



図1 アチック写真

る。その後、敬三は大学時代の同級生達とアチック・ミュージアム・ソサエティを組織、大正14年（1925）にアチック・ミュージアム（以下、アチック）と名称を変えてから、本格的な採訪調査や民具蒐集をはじめた。これらの調査・蒐集において敬三らアチック同人は、スチールカメラや16mmフィルムカメラによる積極的な映像撮影をおこない、後の資料整理や出版に向けた準備も怠らなかった。その際に撮影された膨大な数の写真（図1。以下、アチック写真）は、常民研以外にも、昭和14年（1939）に東京保谷に設立された日本民族学会附属民族博物館の流れを汲む国立民族学博物館や国文学研究資料館、敬三の手紙やプライベートの写真など敬三の個人資料を収蔵する渋沢史料館、同人であった宮本勢助・馨太郎父子の資料を収蔵する宮本記念財団などに残されている。このアチック写真はこれまでも、歴史学・民俗学・民族学・人類学・社会学など、数多くの学問において撮影当時を知る貴重な資料として価値を見出され、研究の資料として利用されてきた。しかし、これらは研究者間での利用に留まっていたのが実情で、一般に向けての資料整理・公開は行なわれてはこなかった。

アチック写真に関する様々な情報は、アチックの出版物である彙報やノート、アチック同人による著作物などから抽出することができる。しかし、撮影当時からの経年の間に、撮影された場所や被写体自体が分からなくなった写真が多く存在するという現状であった。常民研では整理が進んだ資料から、目録・デジタルデータ化を進め、冊子あるいはインターネット上での公開を始めた。これらの整理作業等を引き継いだ形となった国際常民文化研究機構では、所蔵資料の情報共有化に向け、順次、整理・公開作業を続けている。これら整理・公開、また国際常民文化研究機構共同研究内での資料の活用の結果、撮影された写真に関する情報が、地元や出身の方々から寄せられるようになってきている。

### 「アチック写真」の名称について

従来「澁澤写真（仮）」と呼ばれることもあったが、敬三による撮影以外の写真が多数を占めているということ、また、アチックとしての調査活動中に撮影された写真が大多数であることが判明したため、誤解を生じさせないように名称を「アチック写真」とした。

### 写真資料の形態と収蔵状況

およそ9000点のうち半分弱である4000点ほどはアルバムに綴じられており、アチックの調査ごとにまとめられている。多くの場合、台紙1枚に写真1点が貼られている。アルバムは台紙数枚程度のものから100枚を越えるものまで様々である。多くの台紙には整理用の番号がスタンプされ、撮影場所、撮影日、被写体についての解説等が記入されていることもある。また、台紙を中表紙として使用したものや、写真が貼られていた形跡だけのものもある。残る5000点ほどは、財団法人日本常民文化研究所から引き継いだ時点で、アルバムから外された台紙やネガフィルム、ガラス乾板、出版物に掲載するための版下用として伸ばした紙焼き写真、イラストや手書きの原稿など、調査や出版物単位で封筒などにまとめられてい



図2 アルバムと背表紙の拡大

たものである。

[アルバム] 紙焼き写真が台紙に貼られ、アルバムに綴じられた資料(図2)。写真が貼られた台紙以外に、黒や青の間紙、中表紙などにも文字情報が記載されている場合があり、これらも資料として整理している。現在、背表紙の酸性紙ラベルが劣化し文字が読めなくなりつつあり、また綴じ金具の酸化による錆も進みつつあることから、台紙をアルバムから外し、1枚ごとに中性紙の封筒に移し替え、アルバム本体も中性紙箱に収納して別々にする作業を行い、同時に、劣化や破損といったアルバムの現状を記録する資料カードを作成している(図3。(2)にて後述)。

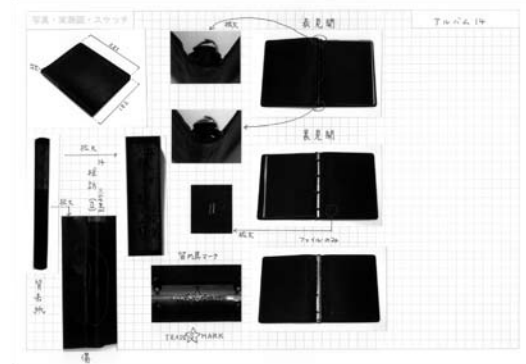
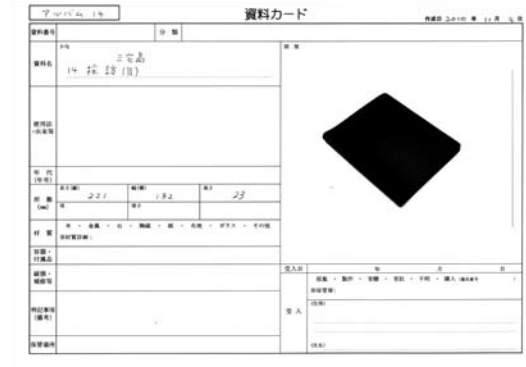


図3 解体したアルバムの記録

[紙焼き写真] 写真印画紙に印刷されたものの、紙焼き写真(図4)。被写体は調査先の人物や風景、民具などで、記念写真の焼き増しや、アチック刊行物の口絵に使われたものもあり、裏面にはその際のトリミングの指示や図版の番号や頁が書かれているものもある。



図4 紙焼き写真と裏面の情報

[ネガフィルム] ケースや封筒、ネガ袋などに入れられたスリーブフィルムや中判サイズのカットフィルム(図5)。資料保存のため、中性紙の封筒に入れ替えており、ネガ袋や封筒に記入されている文字情報も資料として整理している。

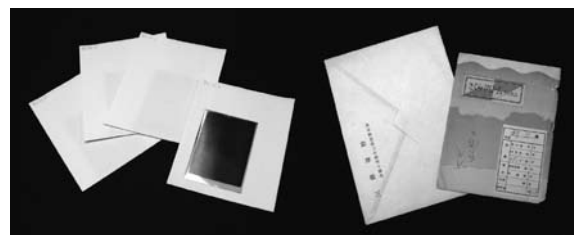


図5 ネガフィルムと情報が記されたネガ袋

[ガラス乾板] 透明のガラス板に、感光体である銀塩の乳剤を塗布して撮影した写真(図6)。ネガフィルムと同様に中性紙の容器に収納し整理を行っているが、経年の劣化によりガラスが割れたり、乳剤面が剥離したりして、復元や修復処置の必要があるものは今回の資料整理の対象外とした。

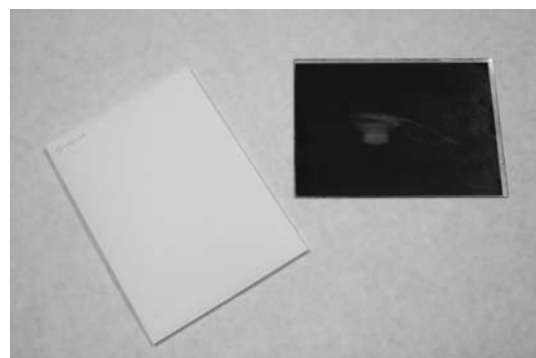


図6 ガラス乾板と中性紙容器

## 写真整理の方法

はじめに、「粗目録」としてアルバムや封筒を単位に、写真や台紙の枚数、背表紙や封筒等に記載された文字情報などからおおよその資料内容を把握した。これによりアチック写真全体の概数や内容把握が可能となった（2009年度完了。以降、更新継続中）。次に、「仮目録」として写真1枚ごとの実物の資料から、入力可能な項目を中心に目録を作成した。アルバムの背表紙・封筒・台紙・写真の裏面に記載された文字情報や、写真・台紙の法量（寸法）、付箋の有無といった、形態的特徴や物質面での情報を記録した。ここまでの整理では特に専門的な知識は必要とせず、入力の規則をまとめたマニュアルをもとに作業を進めることができた。これにより、調査や出版物ごとにおよそ何枚の写真があるかを把握することが可能となった（2009年度完了）。これらを受けて、三段階目として「本目録」の作成を行っている。本目録とは、仮目録で得られた文字情報をもとに、撮影地・撮影日・撮影者に関する情報（台紙に記載がある場合は仮目録の段階で判明している）、出版物などへの掲載の有無、あるいは他の研究機関に所蔵されている同一の写真の情報（常民研所蔵のものとの同定、また追加文字情報の確認など）、常民研所蔵の16mmフィルムの被写体との照合を行っている。またwebサイト上での公開を考慮し、各種の検索に対応するため、写真一枚ごとにタイトルを付している。なお粗目録・仮目録については、後述のアチック写真webサイトを通じてPDFデータにて公開し、本目録は整理の済んだ部分から順次、デジタル画像とともにデータベースに掲載している。

## 情報の抽出・付加

本目録の作成および写真タイトルを付すにあたっては、写真に撮影されている場所・モノ・人・事に関する情報を抽出する。残念ながら、台紙や写真の裏面にそれらが記録されていない場合は、出版物に記載された内容やアルバムの前後の写真などから、基本となる撮影日・撮影者・撮影地の3つの撮影情報を抽出していく（具体例としては、2010年度国際常民文化研究機構年報2を参照）。

**[撮影日]** 撮影日は基本的に敬三自身の旅譜、さらにアチックの調査に関してはアチックの彙報やノートを基にしている。旅譜は敬三還暦記念に出版された写真集『柏葉拾遺』<sup>(1)</sup>や著作『犬歩当棒録』<sup>(2)</sup>に掲載されているもので、敬三の中学生時代から晩年までの旅の記録である。年月日、目的、同行者、経路、移動手段等が詳細に記録されており、写真の文字情報に撮影地が記載されていれば、多くの場合はここから撮影日が推定できる。しかし旅譜は、誤字脱字、手帳の紛失や記録（記憶）違いなどにより必ずしも正確ではない点もあるので、調査以外の場合でもアチックの出版物や同人の著作にて確認する必要性がある。

**[撮影者]** 撮影情報のうち、最も特定の困難なものが撮影者に関する情報であり、撮影者不明（推定不能）となることも少なくない。旅譜や関連の文献を確認し、まず調査参加者を把握するために動向を表にまとめる。ここでは、旅譜で示された移動行程に即して「月」「日」「曜日」「天気」「行き先」「発時間」「(2地点間の)行程」「着時間」「(移動)手段」「訪

間地内の地名（目的・詳細）「宿泊先」といった項目に加え、敬三の同行の有無をはじめその行程に同行した人物の特定をしている（図7）。関連文献などに写真が掲載され、且つ撮影者名が記載されている場合は、この動向表をもとにその撮影者が同行しているかを確認し、撮影者の記載がない場合は、行程から写真を撮影することができた人物を絞り込んでいくということになる。少人数の調査であれば撮影者が特定できるが、大人数が参加した調査でカメラの台数が多い場合、特定には他の資料・文献等が必要となる。

1	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U
2	典拠	月	日	曜日	天気	行き先	発時間	行程	宿時間	手段	訪問地内の地名 (目的・詳細)	宿泊先	決沢	同行者	同行者	同行者	同行者	同行者	同行者	同行者	同行者
171	アチックマンズリー「中部湖 戸内電及の磯魚旅行経過」 p.97-98	5	19	水	晴	瀬戸内島嶼	正午	福徳本島>午島 【香川県仲多度郡 本島村字午島】		船(福武丸)			決沢	磯貝勇	岩倉市郎	小川徹	櫻田勝徳	高橋文太郎	宮本馨太郎	村上清文	山口和雄
172	アチックマンズリー「中部湖 戸内電及の磯魚旅行経過」 p.97-98	5	19	水	晴	瀬戸内島嶼		午島>沙弥島 【香川県仲多度郡 与島村字沙弥島】		船(福武丸)			決沢	磯貝勇	岩倉市郎	小川徹	櫻田勝徳	高橋文太郎	宮本馨太郎	村上清文	山口和雄
173	アチックマンズリー「中部湖 戸内電及の磯魚旅行経過」 p.97-98	5	19	水	晴	瀬戸内島嶼		沙弥島>板出		船(福武丸)	鎌田共済会の特 種設(見学)		決沢	磯貝勇	岩倉市郎	小川徹	櫻田勝徳	高橋文太郎	宮本馨太郎	村上清文	山口和雄
174	アチックマンズリー「中部湖 戸内電及の磯魚旅行経過」 p.97-98	5	19	水	晴	瀬戸内島嶼		板出>割屋島 【香川県仲多度郡 与島村字割屋島】	夕方	船(福武丸)			決沢	磯貝勇	岩倉市郎	小川徹	櫻田勝徳	高橋文太郎	宮本馨太郎	村上清文	山口和雄
175	アチックマンズリー「中部湖 戸内電及の磯魚旅行経過」 p.97-98	5	19	水	晴	瀬戸内島嶼		割屋島>牛窓 【岡山県邑久郡牛 窓町】	2200	船(福武丸)		牛窓港 (定D)	決沢	磯貝勇	岩倉市郎	小川徹	櫻田勝徳	高橋文太郎	宮本馨太郎	村上清文	山口和雄
176	アチックマンズリー「中部湖 戸内電及の磯魚旅行経過」 p.97-98	5	20	木	晴後雨	瀬戸内島嶼		牛窓 【岡山県邑久郡牛 窓町字新島】			本蓮寺・水産試 験場		決沢	磯貝勇	岩倉市郎	小川徹	櫻田勝徳	高橋文太郎	宮本馨太郎	村上清文	山口和雄
177	アチックマンズリー「中部湖 戸内電及の磯魚旅行経過」 p.97-98	5	20	木	晴後雨	瀬戸内島嶼		牛窓>前島 【岡山県邑久郡牛 窓町字前島】		船(福武丸)			決沢	磯貝勇	岩倉市郎	小川徹	櫻田勝徳	高橋文太郎	宮本馨太郎	村上清文	山口和雄
178	アチックマンズリー「中部湖 戸内電及の磯魚旅行経過」 p.97-98	5	20	木	晴後雨	瀬戸内島嶼		前島>豊島 【香川県小豆郡豊 島村】		船(福武丸)			決沢	磯貝勇	岩倉市郎	小川徹	櫻田勝徳	高橋文太郎	宮本馨太郎	村上清文	山口和雄
179	アチックマンズリー「中部湖 戸内電及の磯魚旅行経過」 p.97-98	5	20	木	晴後雨	瀬戸内島嶼		豊島>黒木島 【香川県小豆郡黒 木島村】													

図7 調査等行程表(例、昭和12年)

【撮影地】 撮影地の特定について、台紙や写真裏面に文字情報があれば、旅譜や動向表からでも特定は可能であるが、旅譜に示される地名は市町村名から大字小字レベルまで様々である。より視覚的に調査行程を把握するため、撮影地の特定には、地図を作成している（図8）。アチックから彙報またはノートとして出されている調査報告の中に地図が掲載されている場合はそれをもとに、掲載がない場合は動向表を白地図に落として、移動行程を図示している。この作成した地図は写真集にも掲載している（後述）。

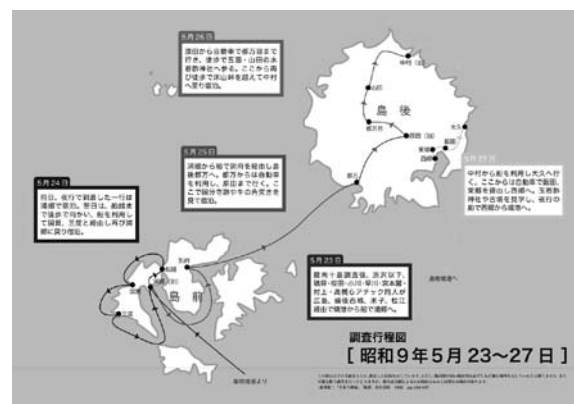


図8 昭和9年5月隠岐調査行程図

以上のように、撮影日・撮影者・撮影地の基礎的な撮影情報を把握し、場所・モノ・人・事などの情報を抽出し、写真タイトルを付与している。撮影者・撮影地が判明しない場合もあるが、「不明」を明らかにした上で公開を行うことで、一般からの情報提供を受け、将来的に「判明」となることを期待している。また場合にもよるが、アチック写真に加えて16mmフィルムで撮影した映像に情報が残っている場合もある。ただし、映像タイトルや各場面のテロップ、調査行程図等の情報が入っているものもあれば、まだ粗編集といった段階のものもあり、映像によって編集の度合いが異なる。前者の場合はアチック写真の撮影

日や撮影地の同定に利用可能であり、映像は写真と違って被写体を様々な角度から捉えており、被写体の同定に大きな役割を果たすことがある。しかし、後者の場合は逆にアチック写真や動向表・行程図から映像内容の特定を行うこととなる。

## (2) アチック写真アルバムの現状確認・収蔵作業と資料カード作成

前述したアルバムは、背表紙の酸性紙ラベルが劣化し文字が読めなくなりつつあり、また綴じ金具の酸化による錆も進みつつあることから、台紙をアルバムから外し、1枚ごとに中性紙の封筒に移し替え、アルバム本体も中性紙箱に収納して別々にする作業を行い、同時に、劣化や破損といったアルバムの現状を記録する資料カードを作成している。このアルバムの現状確認・収蔵作業とカード作成は、日本常民文化研究所で2009年から行われており、本年度からその作業を継続している（本年度まではアルバム1～29までアルバムの解体とカード作成済）。2011年度ではアルバム30～104まで解体・カード作成を行った（尚、アルバムは全122点あり）。『(5)アチック写真資料カード、画像処理マニュアル』において資料カード作成における画像処理のマニュアルを添付する(Adobe Photoshop使用)。

## (3) アチック写真の公開について

**webサイトとデータベース** アチック写真は先に述べたように専用のwebサイトを通じ、粗目録と仮目録、および撮影情報の追跡調査が済んだ本目録のデータベースを公開している。2010年2月18日にwebサイトを開設(図9)して以来、国際常民文化研究機構共同研究班による資料の活用もあり多くのアクセスを記録し、webサイトを通じてそれまで不明だった資料についての情報が寄せられるようになった。

**『アチック写真』の刊行** 写真の公開にあたっては、インターネットを使ったweb上での公開のほかに、写真集『アチック写真』を刊行している(図10)。2011年度までに6冊を刊行した。現地調査の際に活用できるように質問形式としたもの(vol.1・2・4)、特定の地域を網羅的に掲載したもの(vol.3)、追跡調査で得られた詳細な情報を掲載したもの(vol.5・6)など、それぞれの編集方針は異なっている。また、専用webサイトではPDF版の提供も行っている。



図9 アチック写真 webサイト  
<http://atticblog.jominken.kanagawa-u.ac.jp/>



図10 『アチック写真』

## (4) 公開写真の利用について

## ①神奈川大学国際常民文化研究機構・共同研究での利用

## ◆2011年度

## 研究グループ1-3. 環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究

2011年5月19日から29日、9月10日から20日、2012年1月28日から2月7日のそれぞれにおいて、敬三らのアチック薩南十島調査団撮影の写真のうち、各島に於ける島民、マルキブネ、イタツケ等が写っているものを選び、その建造方法及び運用方法について、トカラ列島で調査を行った。

## 研究グループ4-1. アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

2011年7月16日から17日に国立民族学博物館において、共同研究会を開催し、あわせて民博の収蔵標本資料に関する調査を行い、アチック調査団による「薩南十島」(トカラ列島)調査(1934年)の口之島と中之島に地域を限定し、写真・16mm映像に記録されて

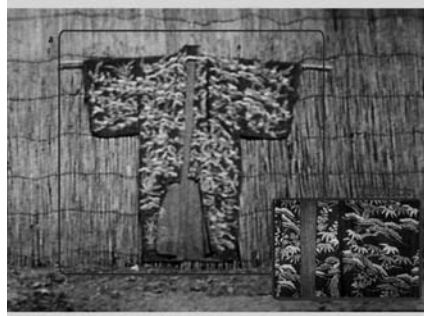


図11 アチックフィルム「十島鴻爪」(口之島)の一部(左)、民博・標本番号H0016601資料(右)(国際常民文化研究機構HPより転載)

いるモノと、現在、国立民族学博物館に収蔵されている当時の収集品(モノ)の対応関係の調査を行った。

## 研究グループ4-1. アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

2011年12月16日から20日にかけて、台湾台南県・屏東県を訪問し、昭和12年にアチックの宮本馨太郎と小川徹、および当時台湾で調査を行っていた鹿野忠雄の3人によるパイワン族調査で撮影された16mmフィルムおよび写真を現地の人に見てもらいながら、当時やその後の状況に関する聞き取り調査を行った。



図12 屏東県泰武郷でのフィルム上映調査(国際常民文化研究機構HPより転載)

## 研究グループ4-1. アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象

2012年3月26日から29日にかけて、2010年度の口之島調査、2011年度の中之島調査の補足調査を行った。それぞれの島では、前回の上映会時に当時の映像に関する情報を寄せてくれた高齢者を中心に戸別訪問を行い、より詳細な聞き取り調査を行った。



図13 アチック写真 目録番号:ア-10-77「中之島の島中社」(左)、現在の島中社(右)(国際常民文化研究機構HPより転載)

研究グループ2-2. 東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史  
研究グループ4-1. アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象  
研究グループ5-1. 第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学

2012年2月12日から16日にかけて、  
渋沢敬三50年忌記念事業の一環として  
財団法人MRAハウスから助成を  
受け、また、共同研究3グループ、  
日本常民文化研究所、渋沢史料館など、  
多くの関係機関やプロジェクト



図14 草墳(チョボン) (左)、アチック写真中に母親に抱かれる本人(右) (国際常民文化研究機構HPより転載)

から参加し、国際常民文化研究機構  
と学術交流協定を結んだ木浦大学校島嶼文化研究院とともに「昭和11年アチック多島海  
探訪の検証」として調査を行った。

## ②資料閲覧

### ◆2011年度

飯田市美術博物館 (2012年1月19日)

柳田國男没後50年記念企画展「民俗の宝庫〈三遠南信〉の発見と発信—柳田國男・折口  
信夫らによる調査研究のあゆみ—」(仮)に関して、アチック写真および関連文献の閲  
覧をおこなう。

高麗博物館 (2011年6月28日)

企画展「絵はがきで知る朝鮮—1945年まで—」に関して、アチック写真および関連文献  
の閲覧をおこなう。

近畿大学 文芸学部 (2011年8月5日)

台湾研究に関して、アチック写真および関連文献の閲覧をおこなう。

国立歴史民俗博物館研究部民俗研究系 (2011年10月26日)

展示室リニューアルに関して、渋沢敬三とアチックミュージアムの調査・活動に関する  
アチック写真および関連文献の閲覧をおこなう。

東京都新島村教育委員会 新島村博物館 (2012年2月21日)

展覧会に関して、新島・式根島関係のアチック写真および関連文献の閲覧をおこなう。

## ③資料掲載等

### ◆2011年度

『博物館学事典』(2011年6月23日)

全日本博物館学会編『博物館学事典』、内川隆志「アチック・ミュージアム」の項に「ア  
チック・ミュージアムの屋根裏の様子」が(目録番号 写4-1-7-2)が掲載される。



高麗博物館 企画展「絵はがきで知る朝鮮」(2011年8月3日～10月2日)

企画展「絵はがきで知る朝鮮」へ「水汲桶とナマグサ桶」(目録番号 ア-15-51)、「焚木をカベル女」(目録番号 ア-18-51-1)、「頭にものを載せ運ぶ女性たち」(目録番号 ア-59-38)、「鎮里のパアチゲと杖」(目録番号 ア-64-18)が展示される。

ブラジル日本文化福祉協会でのセミナー開催に関するチラシ(2011年9月8日)

ブラジル日本文化福祉協会で開催されたセミナー開催に関するチラシに「アシナカ」(目録番号 ア-82-1)、「斉藤家々族及び使用人」(目録番号 写1-18-12-2)、「下伊那郡神原村本山にて越前出身の炭焼きの男性達」(目録番号 河1-29-18-2)が掲載される。

蔚山博物館(大韓民国)特別企画展「75年ぶりの帰郷、1936年蔚山達里」  
(2011年11月29日～2012年2月5日)

特別企画展「75年ぶりの帰郷、1936年蔚山達里」(後援：国立民族学博物館、韓国国立民俗博物館)へ、「朴容文氏の家屋」(目録番号 写1-9-9-1)、「家屋前での調査員と現地の人々の集合写真」(目録番号 写1-9-28-2)、ポートレート(目録番号 写1-9-33-1～6、写1-9-34-1～6)「ポートレート、崔應錫氏」(目録番号 写1-9-34-2)が展示される。また、図録に掲載される。

『海の狩人沖繩漁民—糸満ウミンチュの歴史と生活誌』(2012年3月19日)

加藤久子著『海の狩人沖繩漁民—糸満ウミンチュの歴史と生活誌』に「糸満のへぎ舟石垣にて」(目録番号 ア-119-5-2)、「石垣島のタターチャ」(目録番号 ア-119-7-2)が掲載される。

(註)

- (1) 柏窓会『柏葉拾遺』1956 柏窓会は住み込んでいた書生や、アチックに集まった同人など、澁澤家に集う人々の同窓会的組織である。
- (2) 渋沢敬三『犬歩当棒録』角川書店 1961 p.339-589 『柏葉拾遺』の旅譜は昭和31年8月まで、『犬歩当棒録』にはその後も含めて昭和35年8月まで記録されている。

(5) アチック写真資料カード、画像処理マニュアル

資料カードについて 資料カードの項目ごとに記入をする。

◆表面

資料番号		分類		資料カード		作成日 2 年 月 日	
資料名	かな 3			図 7			
使用法・由来等							
年代 (年号)							
形態 (mm)	長さ(縦)	幅(横)	高さ				
材質	※材質詳細: 4 5						
容器・付属品							
破損・補修等	6			受入日	年 月 日		
特記事項 (備考)				受入	採集・製作・寄贈・寄託・不明・購入 (商品番号)		
保管場所					※保管者: (住所)  (氏名)		

◆裏面

写真・実測図・スケッチ	8											
9												

## ◆表面

1：アルバム番号

2：資料カード作成日

3：アルバム名（背表紙表記名）

アルバム背表紙に書かれたままを記載。

4：形態情報

長さ（縦）・幅（横）・高さを記入（台紙が綴じこんだままの状態です計測。カードには「厚さ」の項目があるがここでは「高さ」の項目で代替）。単位はミリメートルを使用し「1 cm」の場合は「10」と表記。ここでのそれぞれの情報は裏面の写真・スケッチ部分に反映させる。

5：材質情報

目視によって判断できるレベルで、複数の材質が使用されている場合はすべてにチェックをする。専門的な分析などにより、詳細な材質名が判明した場合は「材質詳細：」の後ろに材質名を記入する。アルバムの外側部分での材質を記載したため多くのカードで「金属」や「紙」にチェックが入っている。

6：破損・補修等

アルバムが破損している場合はその破損箇所と破損状況を記入する。あわせて裏面の写真・スケッチ部分にも反映させる。

7：写真貼付

デジタルカメラで撮影した資料の写真をL判（89mm×127mm）で出力したものを貼付（資料カード作成における画像処理のマニュアルにて詳述）。

※ これ以外の記入箇所も必要に応じて使用する。

## ◆裏面

8：アルバム番号

9：写真・実測図・スケッチ等詳細情報

主に写真を貼り付けて寸法を書き込む、またはスケッチ（見取り図）をここに描く。写真・スケッチはカード表面資料写真の補足情報であり、寸法の記入や破損・欠損等の位置情報などを書き込むことを旨とする。写真・スケッチとも、資料カード表面「4形態（mm）」の項目に即して法量を記入する。カード表面以外の写真や別紙による詳細な情報、ならびに、カード表面記入欄に収らなかった情報などは、当欄に記入または貼付をする。

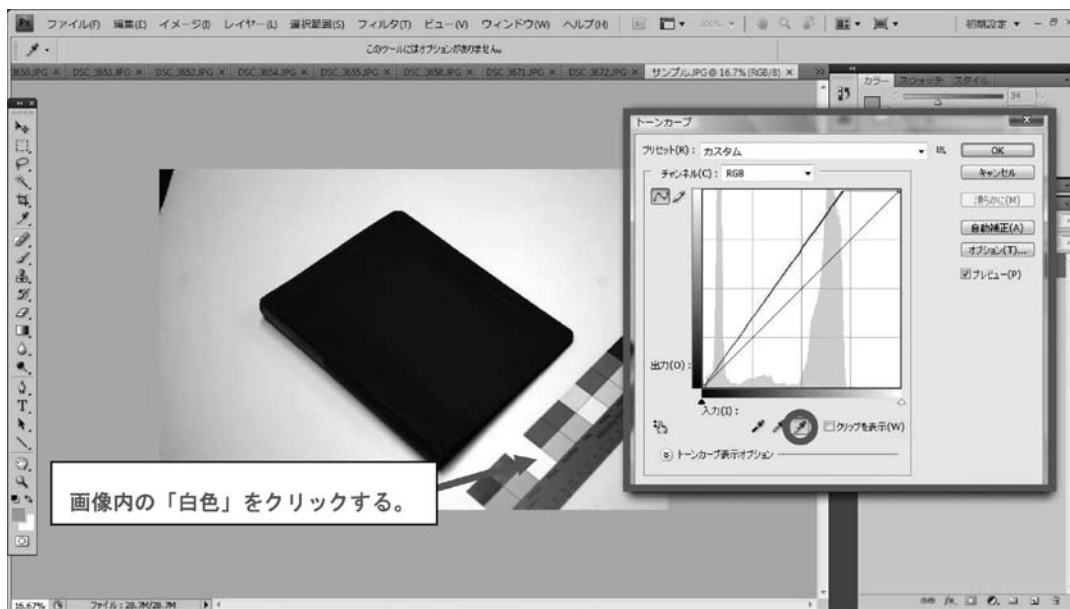


## 資料カード作成における画像処理のマニュアル

1. カード用に撮影した写真をハードディスクに移し、現状記録撮影画像フォルダにそれぞれに相当するアルバム名のフォルダ（例えばアルバム3なら「アルバム003」）を作る。
2. アルバム名フォルダ内に撮影した画像を入れ、「補正済み画像」フォルダを更に作る。
3. 撮影した写真を各アルバム別にフォルダに入れたら、資料カードに貼付する画像を選びフォトショップを開く（以下、CS 4バージョンで説明）。
4. カード表に貼る画像（カラーチャート入りの画像）を補正する。「トーンカーブ」を選択する。



5. 下図ウィンドウの下の方に3つあるスポイトの一番右のスポイトマークをクリックし、画像のカラーチャートの白い部分をクリックする（白色点の調整）。



6. トーンカーブ内ウィンドウの点をドラッグして明るさを調整する。



7. 背景の余分な部分を「消しゴム」を選択、続けて右上にある小さな白い四角をクリックする。その後、消したい部分をドラッグする。

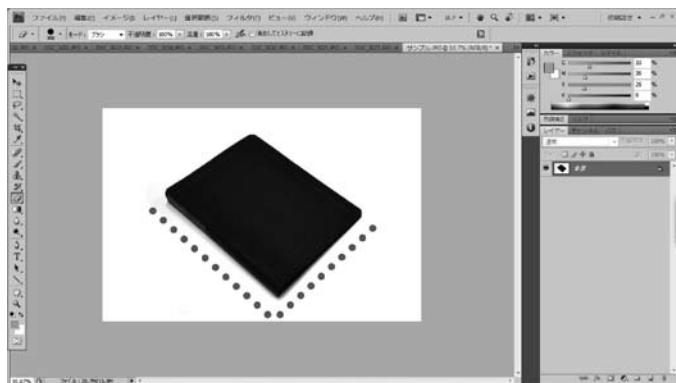


→失敗した場合

…①：上メニューの「ウィンドウ」から「取り消し」を選ぶ。

…②：上メニューの「ウィンドウ」から「履歴」を選び、「トーンカーブ」まで戻って選択する。そうすると消しゴムをかける前の状態に戻ります。

8. カラーチャートや四隅などを消し終わったら完成。点線のあたりの影を残しておくとも自然な感じになる。



9. 補正が完成したら、最初につくった「補正済み画像」のフォルダにファイルの種類を「JPEG」にして保存。プリンタを選び、「メディアサイズに合わせて拡大・縮小」にチェックを入れ、「ページ設定」をクリックする（プレビュー画面で確認）。品質設定を「フォト」にし、用紙を選択。紙の種類を写真用紙・光沢紙を選択。L判写真用紙（大きさ「9×13cm（3.5×5 inch）」）でプリントする。

10. カード裏面用写真の修整・補正もこれまで同様「トーンカーブ」で白色点調整をする（5.参照）。例の場合、下の○のあたりをクリック（カラーチャートの無い画像は、白く一番明るい部分をスポイトでクリック。）



11. 画像の中の余計な部分を切り抜く場合（左メニュー「切り抜き」ツールを使用）。画像の中の切り抜きたいところをドラッグする（切り抜き対象の部分が明るく、不要な部分が暗く表示される）。



12. ファイルにはそれぞれ「カード表面用」や「ファイルのみ」、「ラベルアップ」、「書き込み」等適宜変更する。その後それぞれのファイルをプリントアウトし資料カード裏面に貼付する（資料カード例、参照）。

※資料カード裏面用写真プリントについて：CS 3では「コンタクトシート」が上メニュー内「ファイル」にあるがCS 4には無い。CS 3の場合は1用紙に9分割した画像でプリントできる。



CS3: コンタクトシート例



## 2) プロジェクト型共同研究の推進 業務報告

第2業務のプロジェクト型共同研究は、2011年度で3年間にわたる共同研究に関する調査研究の最終年度として活動を行なった。

2011年度も、4月23日に行われた運営委員会において昨年度と同じ8プロジェクトから提出された研究計画と予算が記された交付申請書を審議し、承認された。2011年度プロジェクトの概要は、以下の通り。1. 漁場利用の比較研究（田和正孝ほか4名）、2. 日本列島周辺海域における水産市に関する総合的研究（伊藤康宏ほか9名）、3. 環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究（後藤明ほか13名）、4. 民具の名称に関する基礎的研究（神野善治ほか14名。1名辞退し、2名の新規研究協力者を加えた）、5. 東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史（角南聡一郎ほか8名）、6. アジア祭祀芸能の比較研究（野村伸一ほか9名+国外研究協力者7名）、7. アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象（高城玲ほか5名）、8. 第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学（泉水英計ほか9名。新規共同研究者1名を含む）。

それぞれのプロジェクトでは、調査期間の最終年度であることを念頭において、共同研究会、国内調査、海外調査を行なった。プロジェクトごとの活動内容については、後掲の「活動日誌」における「プロジェクト型共同研究の推進」の項目で時系列的に記録がある。また、「事業の年間活動状況」の表では、プロジェクトごとに活動内容が表化され、いつどのプロジェクトがどのような活動を行ったのかが概観できる資料となっている。

以下、活動内容ごとに、全体の流れとともに特色ある活動について概説する。

### ○共同研究会

共同研究会の活動として特筆したいのは、2011年9月に田和班と伊藤班が合同で研究会を開催した点である。国際常民文化研究機構には、研究の広がりとともに研究者同士あるいは研究グループ間のネットワーク形成が期待されている。とくに、プロジェクト型研究の間でこのような研究のネットワークが形成されることは、本機構の一つの大きな成果だと評価できよう。

8つのプロジェクトで、2011年度はのべ19回の共同研究会が開かれた。年度最終会の共同研究会では、3年間の調査研究を踏まえて、その成果報告およびそれに対する討論というまとめの研究会を開催したプロジェクトがいくつかある。3年間の成果報告は、2012年度以降成果報告書としてまとめられる予定だが、それだけではなく、公開の成果報告会も予定されている。今までは、プロジェクト参加者だけの共同研究会での成果報告と討論であったが、それを公開として他のプロジェクト参加者や一般の研究者にも参加していただいて、公開で成果報告会が行なわれる。したがって、2012年度と2013年度においては、公開成果報告会としての共同研究会が継続して行われることになる。

### ○調査研究

調査研究は、プロジェクトでの共同調査と各個人の調査に分けて実施されている。今年度は、全体でのべ80回の調査研究がおこなわれ、そのうち23回が海外調査研究となっている。プロジェクト共同研究者と国外研究協力者は86名であるが、調査研究は回数であり、のべ人数では100名をゆうに超えているので、ほぼすべての共同研究者が調査研究に参加

したということになる。調査研究の最終年度である2011年度においても、活発な調査研究が行われたといえることができる。

#### ○公開研究発表会

例年第3業務の一環として国際シンポジウムが12月に開催されている。2011年度は、12月10日に「“カラダ”が語る人類文化—形質から文化まで—」と題して開催された。この内容は、第3業務の業務報告で報告されるので省略する。国際シンポジウムの翌日は、野村班を中心とした公開研究会が開かれた。テーマは、「海の民俗伝承と祭祀儀礼—舟による神の来往と身体表現—」であり、李京燁「韓国西海岸の送船儀礼研究」、姜昭全「済州島巫俗のヨンガムノリと船送り」、謝聰輝「南台湾における和瘟送船儀礼の身体技法・パフォーマンスに関する分析」、吉野晃「タイ北部、ユーミエン（ヤオ）の船送り」という4人の研究発表が行われた。それを踏まえて「アジアの身体表現の比較研究をめぐって」と題して総合討論が行われた。

研究発表に先駆けて、韓国の巫女集団を招聘して、「韓国巫女による龍王蔡・刀上舞・神将舞の上演」が行なわれた。神奈川大学セレストホールでそのパフォーマンスは行なわれたが、本格的な祭壇を設え、祭具も本格的なものが持ち込まれた。ホールは、パフォーマンスと観客の間で熱のこもったやり取りが行われ、成功裏に終了することができた。巫女集団がわざわざ韓国から持参した祭具などは、終了後国際常民文化研究機構に寄贈された。

従来の公開研究会では、成果発表が中心に行なわれてきたが、2011年度は韓国の成果報告に合わせたパフォーマンスが行われ、まさに研究テーマである神事と身体表現を実際に見ることができ、充実した公開研究会となった。

以上、調査研究の最終年度において、第2業務のプロジェクト型共同研究は、各プロジェクトにおける調査研究の推進だけでなく、それを踏まえた公開研究会や相互交流が行なわれて、研究のネットワークの形成が次第に発展してきたといえる。来年度以降は、プロジェクト研究の成果発表を通して、研究ネットワークの発展に力を入れていくことになる。

(小熊 誠)

### 3) 事業運営の総合的推進 業務報告

学際的・国際的な共同研究拠点の確立を目指して、昨年度に引き続き機構運営委員会の主導のもとに、国際シンポジウム、学術交流、共同研究に関する研究会の開催、ウェブサイトを整備などを推進した。

#### ○国際常民文化シンポジウムの開催

第1回「海民・海域史からみた人類文化」、第2回の「“モノ”からみた人類文化」に続き、「“カラダ”が語る人類文化—形質から文化まで—」を12月10・11日に開催した。身体表現を中心に、形質から文化まで、海外の研究者も招きその可能性について論議した。合わせて韓国巫女による儀礼の実演を公開した。

#### ○公開研究会の開催

人文社会系の共同調査・研究の望まじきあり方を引き続き検討、9月、坂野徹氏（日本

大学教授)「寄り合いと朝鮮戦争 ―宮本常一の九学会連合対馬調査をめぐって―」、コメンテーター：田村善次郎氏(武蔵野美術大学名誉教授)、3月 篠原徹氏(琵琶湖博物館館長)「大学共同利用機関と共同研究 ―問題発見型と問題解決型の共同研究をめぐって―」を開催した。加えて共同研究体制の推進では、国立民族学博物館・東京大学史料編纂所・南山大学人類学研究所・渋沢史料館との連携を図った。

#### ○海外研究機関とのネットワーク形成

平成23年度には、韓国多島海地域を記録したアチック・フィルムの共同研究、漁業方面の資料研究の提携機関として、韓国木浦大学校島嶼文化研究院と学術協定を締結した。また、ブラジル・サンパウロ大学日本文化研究所と日本常民文化研究所との学術協定についても準備を行っている。

平成23年度は、これらの協定機関との共同研究をさらに推進し、研究拠点の国際ネットワーク形成を図った。中国とは舟山列島での漁業文化の共同研究、韓国とは文書資料や絵図などの収集、公開、研究方法に関する共同研究の推進について交渉を進めた。また、日本常民文化研究所所蔵のアチック映像・写真をもとにした韓国における木浦大学校島嶼文化研究院との共同研究の実施も計画し、2月には韓国多島海での共同調査を行なった。9月には、機構研究員3名が、日本常民文化研究所の事業の一環としてブラジル・サンパウロを訪問し、日系移民史料館においてフォーラム「ひと・もの・暮らし―常民のみた日本」を開催し学術交流を進めた。さらに、2月には、サンパウロ大学の森幸一教授を招聘し、研究会を開催し、神奈川県沖縄県人会調査を共同で行った。3月には日本常民文化研究所の総合調査である瀬戸内海二神島の調査に、韓国木浦大学校島嶼文化研究院の研究者2名、上海海洋大学の研究者1名を招き、総合調査の方法等についての意見交換を行ない、公開研究会のテーマともなっている共同調査のあり方について検討した。

#### ○ウェブサイトの整備―活動成果の情報化・公開化

昨年度に引き続き、ウェブサイトに活動の状況を随時公開した。今年度から、機構刊行物の公開を開始し、『神奈川大学国際常民文化研究機構 年報1』『国際シンポジウム報告書Ⅰ 海民・海域史からみた人類文化』をPDFによって公開した。

#### ○共同研究の円滑な運営と国際化を含む事業の総合的推進

##### ・会議

機構運営委員会3回・学内運営委員会6回を開催、事業運営・活動の審議を行った。

##### ・共同研究代表者会議

引き続きプロジェクト型共同研究の代表者に集ってもらい、研究班相互のネットワークの構築、意見交換を行う機会を持ち、新たな共同研究システムの構築を模索した。

##### ・国際シンポジウムへの参加

機構運営委員長の佐野は、5月中国北京、中国社会科学院、11月台北、台湾芸術大学より招聘され、国際常民文化研究にかかわる意義、資料論、データベースの利・活用について講演を行った。

(佐野 賢治)